

? アフリカ 24 コートジボワール ダンスとサッカー

著者	原口 武彦
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジアを見る眼
シリーズ番号	90
雑誌名	「あそび」と「くらし」： 第三世界の娯楽産業
ページ	168-172
発行年	1994
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00017799

V
ア
フ
リ
カ

{24} コートジボワール

ダンスとサッカー

原口武彦

ディスコで踊る

コートジボワールの人びとにとってダンスは娯楽といえるのだろうか。たしかに人びとはよく踊る。

経済主都アビジャン、週末の夜ともなれば市内の各所にあるディスコは盛況だ。庶民が足りぬかよるのは、ディスコといっても塀で囲われた青天井の中庭みたいなところで、飾りといえば色豆電球がところどころに申し訳程度に連なっているくらい。入口で、高いところで一〇〇CFAフラン（約五〇〇円）の入場料を払うと、掌にスタンプを押してくれる。これでその一夜のその後の出入りは、掌を見せれば何度でも自由、というわけ。広い中庭を囲むように椅子がばらばら置かれ、隅にはビールやコーラを売るカウンターが設けられている。

ディスコといつてもたいがいは生演奏。十時頃やっと始まる演奏のバカでかい音量に匹敵す

るだけの人びとが踊り場に繰り出すまでにはさらに一時間。それから夜明けまで、人びとは延々と踊りつづける。ステップの踏み方などにはこだわらない。男女がべったり寄り添ったりもあまりしない。男性も女性も、カップルもつぐらず、一人で勝手気ままに踊っている人もいる。いつのまにか、一つの大きな輪ができ、その中心にソリストが登場し乱舞し、拍手喝采を浴びたりする。足というよりも腰できざむリズムだけは音楽にぴったり合っている。いつぞや、車椅子に乗ったおじさんを見かけた。彼は肩をゆすってリズムをとっていたが、それが何ともさまになっていた。

歌い踊る葬列

コートジボワールの人びとは、このようにダンスが好きなのはたしかだが、娯楽という以上に生活の中に深くかかわっている。冠婚葬祭には欠かせないもの。祭は分かるが葬にも出てくる。あるとき、アビジャンの郊外で、色とりどりのパーニユ（西アフリカの婦人着）で着飾った婦人たちの行列にでくわした。ハンカチのような布の小切れ



を片手にふりながら、歌い踊りながら行進してくる。こういう場合も、特に振り付けというのはなく、日本の阿波踊りほどではないが、やや前傾姿勢で足を踏みならすのが基本動作である。すくくと伸びあがることは決してなく、彼女らは、ひたすら大地とだけ対話しているようだ。この行列は、郊外のある村の長老の葬儀で、市営の集団墓地に向かう霊柩車に従う葬列であった。(写真参照)

サッカー大好き

ダンスよりも現代風な娯楽のイメージによりびつたりくるのは、フランス語圏アフリカでもフットボールと呼ぶサッカーである。アビジャン市の心にはウフェ・ボワニ大統領の名を冠した夜間照明つきの立派な競技場がある。強豪チーム同士の対決ともなれば、大歓声がこだまする。だいたい、競技の終わるのは八時頃。その直後の競技場周辺には興奮さめやらぬ観衆が溢れでてきて、小一時間ばかり交通は完全に麻痺してしまう。

コートジボワールでは独立以来の教育重視政策で、どんな地方にいても必ず小学校がある。小学校があるところ必ずサッカーのゴールがつくられている。私は前回アビジャンに滞在したとき、子供たちに野球を教え込もうと、はるばる持参したグローブを近所の子にはめさせ、キックボールをやってみたのだが、どうにもさまにならなかった。その彼らが、サッカーボールを預ければ、それがボロ布を巻き付けてつくった代用ボールであろうが、実に器用に蹴りあ

げる。

アフリカン・カッ プ優勝の興奮

一九九二年一月早々、このサッカー好きのコートジボワールに椿事が起こった。セネガルのダカール市で開催された第十八回アフリカン・カップで、わがコートジボワールは強豪ガーナを破って見事、優勝してしまつたのである。この大会での優勝は、建国以来の快挙である。早速、翌月曜日と火曜日は、大統領令で臨時休日となり、国をあげての大祝祭となつた。

二十八日火曜日、アビジャンに凱旋してきた一行は、ウフェ・ボワニ大統領をはさんで両側に選手代表二人が乗り込んだオープンカーを先頭に、数万人の観衆が待ちうける歓迎集会場のウフェ・ボワニ・スタジアムまでパレードした。火、水と一通り歓迎行事をすませた一行は、木曜日には首都ヤムスクロに向かい、大統領邸を訪問し、そこで改めて優勝の報告を行った。そしてこの席で、大統領は、選手一人一人に報奨金として五〇〇万CFAフラン（約二五〇万円）と、四寝室の邸宅二戸ずつを贈ると発表したのである。

一九八〇年に入ってから、主要輸出産品であるココア、コーヒーの国際価格が低迷しているため、独立以来、七〇年代末まで持続してきた高度経済成長も終焉し、以来、ずっと経済不況にあえいできたコートジボワール。八九年からは構造調整が本格化し、その反動で九〇年春には独立以来、最大の政治危機。八九年十二月に隣国リベリアで始まつた内戦は泥沼化して未だ

おさまらず……などなど、このところ明るいニュースがまったくなかったコートジボワールの人が、この優勝のニュースに歓喜したのはよく分かる。

しかしそれにしても、である。一人五〇〇万CFAフランの報奨金はまだしも、そのうえに邸宅一戸ずつとは。まだ地価の安いアビジャンとはいえ、時価一〇〇〇万CFAフランは下るまい。だが国民の間からこの大統領の大盤振舞の措置に異議申立ては出なかったようだ。天から降ってきた二日の休日を、庶民はただひたすら狂喜乱舞して過ごしたのである。

*

そして、その興奮さめやらぬ二月十八日には、優勝パレードが通過した同じ目抜き通りの商店街のショーウィンドーは軒並み打ち壊されるというまたしても暗いニュースが待っていた。一九九〇年春政治危機の後遺症の反政府デモの一部が暴徒化したのである。そのデモを組織した責任を問われて、最大野党FPIのバボ書記長が逮捕され、またあまりはかばかしくないアビジャンの日常が再開したのだった。

（はらぐち たけひこ／アジア経済研究所総合研究部主任調査研究員）